

# ポール・ブルジェ『死』と二つの世界大戦

—戦時下の日本における仏文学受容の一側面—

田 中 琢 三\*

## 1. はじめに

1967年（昭和42年）に刊行された三島由紀夫（1925-1970）の『葉隠入門』に以下のような記述がある。

「葉隠」がかつて読まれたのは、戦争中の死の季節においてであった。当時はポール・ブルジェの小説「死」が争って読まれ、また「葉隠」は戦場に行く青年たちの覚悟をかためる書として、大いに推奨されていた<sup>1</sup>。

ここで言及されているポール・ブルジェ（Paul Bourget, 1852-1935）は、バル・エポック期、つまり19世紀末から20世紀初頭にかけて、アナトール・フランス（Anatole France, 1844-1924）やモーリス・バレス（Maurice Barrès, 1862-1923）らとともにフランスを代表する小説家のひとりとして名声を博した作家である。しかし、21世紀の現在では、日本においても、本国フランスにおいても、彼の著作は一部の評論を除いてほとんど読まれなくなっている。三島由紀夫が「戦時中の死の季節」の象徴としてブルジェの作品に言及したのは、その「死」という直接的なタイトルによるところが大きいと思われるが、少なくとも、この三島の文章は、今や忘れ去られてしまったブルジェの小説が、「戦時中」、つまり第二次世界大戦期には、山本常朝の『葉隠』とともに、多くの読

者を獲得していたことを示している。

実際、まさに第二次世界大戦が始まった1939年（昭和14年）に刊行された *Le Sens de la mort*（直訳は「死の意味」）の翻訳『死』はベストセラーになり、おそらくそれを契機として、その後、戦時下の日本でブルジェの小説の翻訳が次々と出版されている<sup>2</sup>。本論文では、日本におけるブルジェの受容とその思想的、社会的背景を検討しながら、なぜブルジェの小説が戦時下の日本で読まれたのかを考察したい。

## 2. ブルジェについて

まず、簡単にブルジェの文学と思想を紹介しておきたい。彼の作家としてのキャリアは3つの時期に分けることができる。第一期は1880年代前半で、ブルジェは同時代文学の慧眼な批評家として活躍した。特に『現代心理論集』*Essais de psychologie contemporaine*（1883年）はブルジェの出世作となる評論集であり、そこに収録された「デカダンスの理論」は19世紀末のデカダンス文学の最初のマニフェストとして今なお名高いものである。第二期は1880年代後半で、ブルジェはゾラ流の自然主義小説に対抗して、社交界を舞台にした心理分析小説を発表し、小説家としても成功を収めた。

第三期は彼の代表作といわれる小説『弟子』*Le Disciple*（1889年）から始まる。ブルジェは、『弟子』で作家としての地位を確立して以降、1935年（昭和10年）に死去するまで、数多くの小説を発

\*お茶の水女子大学大学院助教

表するが、それらの大半は、カトリシズムの擁護、フランス革命の否定、民主主義批判などの伝統主義イデオロギーを説く教訓的な作品であった。そして、メロドラマ的な恋愛小説の書き手でもあったブールジェは、第一次世界大戦前までは保守的なブルジョワ層、特に女性を中心に絶大な人気を得ていた。しかし戦後は社会の変化とともに急速に読者を失い、彼の作品の文学的価値も、20世紀の新しい文学、特にシュールレアリスムの登場によって否定されていくのである。

### 3. 明治期におけるブールジェの紹介

明治期の日本では、1878年（明治11年）の川島忠之助（1853-1938）によるジュール・ヴェルヌ（Jules Verne, 1828-1905）の『八十日間世界一周』*Le Tour du monde en quatre-vingts jours*（1873）の翻訳を嚆矢として、フランス文学の作品が数多く訳されているが、日本人によるフランス文学研究の機運が高まってくるのは1890年代後半のことである<sup>3</sup>。そして、当時、フランスで作家として確固たる地位を確立していたブールジェは、同時代のフランスを代表する小説家のひとりとして日本に紹介された。例えば、上田敏（1874-1916）は1897年（明治30年）に発表した論文「仏蘭西文学の研究<sup>4</sup>」のなかで、ブールジェについて「心理洞察の鋭利なるを以て称せられる」と紹介している<sup>5</sup>。また、永井荷風（1879-1959）は1909年（明治42年）に発表した論文「仏蘭西現代の小説家<sup>6</sup>」において、ブールジェに関して「この人はゾラと相並んで、最近仏蘭西小説界の大勢力を握つて居るのである<sup>7</sup>」と記している。しかし、明治期には、ブールジェの作品自体は数編の短編小説しか訳されておらず<sup>8</sup>、少なくとも、同じ時期に盛んに翻訳、紹介されて日本の文壇に影響を与えたエミール・ゾラ（Emile Zola, 1840-1902）やギィ・ド・モーパッサン（Guy de Maupassant, 1850-1893）と比べると、ブールジェの知名度や人気は決して高くな

かったと思われる<sup>9</sup>。しかし、第一次世界大戦期になると、日本で本格的なブールジェの研究が始まり、大正から昭和初期にかけて、ブールジェは小説家としてのみならず、伝統主義の思想家として日本に知られるようになる。この動きに大きな役割を果たしたのが、東京帝国大学仏蘭西文学科（以下「東大仏文」）の初代教授で、日本におけるフランス文学教育を実質的に開始した人物とされるフランス人エミール・ルイ・エック（Emile Louis Heck, 1866-1943）であった<sup>10</sup>。

### 4. エックと『仏蘭西文学史』

エックはいわゆる「お雇い外国人」のひとりで、1891年（明治24年）から1921年（大正10年）まで30年の長きにわたって、東大仏文でフランス語とフランス文学の授業を担当した。エックが実際にどのような講義をしていたのか、その詳細は不明であるが、彼が指導した東大仏文の教え子たちの著作を通して、その講義内容の一端をうかがい知ることができる。特に、エックの教え子のひとりである太宰施門<sup>11</sup>（1889-1974）が1917年（大正6年）に刊行した『仏蘭西文学史<sup>12</sup>』は、日本人が書いた初のフランス文学史とされるが、内容的にはエックの講義が「極めて高い精度で反映<sup>13</sup>」された書物だと考えられており、その意味でも貴重な文献である。以下では、「エックの講義録<sup>14</sup>」とも言われるこの『仏蘭西文学史』を取り上げ、アカデミズムにおけるブールジェの受容を検討してみたい。

『仏蘭西文学史』の冒頭に、「東京帝国大学文学部教授エミール・エック先生より本書の著者に宛てられたる書翰（翻訳）」（以下「書翰」）と題されたエックのフランス語の手紙の日本語訳が掲載されている。重要なことは、この「書翰」において、伝統主義的ナショナリズムに立脚したエックの文学史観が披瀝されていることである。エックは17世紀の古典主義文学を賞賛する一方で、18世紀

の啓蒙主義思想を、「仏蘭西全国に不吉な、革命的な多くの萌芽<sup>15)</sup>」を撒き散らしたとして弾劾する。そして、同時代の文学について以下のように述べている。

偉大な価値を具えて居る作家、例えばポール・ブルジェ、モオリス・バレス、ルネ・バザン、アンリ・ボルドー、シャルル・ペギー等の人人は、仏蘭西の最も卓れた伝統を感得して、力強い一撃を揮ひ、仏蘭西文学を理想主義的な、社会的な、道徳的な、そして宗教的な路に進ませて居ります。人はこれらの作家を慶賀し、嘆賞しなければなりません<sup>16)</sup>。

エックが「偉大な価値」があると評価する作家の筆頭にブルジェの名前が挙げられていることに注目したい。また、モオリス・バレス、ルネ・バザン (René Bazin, 1853-1932)、アンリ・ボルドー (Henry Bordeaux, 1870-1963)、シャルル・ペギー (Charles Péguy, 1873-1914) は、それぞれ作品の傾向は異なるものの、いずれもカトリシズムを擁護し、愛国主義を標榜した文学者たちである。このような伝統主義的ナショナリズムに対する高い評価は、もともとエック自身がカトリック男子修道会「マリア会」の神父であったこと、また、エックが生まれ育ったアルザス地方南西部のベルフォールが、普仏戦争 (1870-71年) 以来、愛国的感情が強い地域であることと無関係ではないように思われる<sup>17)</sup>。

しかし、重要なことは、『仏蘭西文学史』が出版された1917年が、まさに第一次世界大戦の最中であることである。そして「書翰」にみられるエックの愛国主義的イデオロギーは、何よりもこの戦争によって呼び覚まされたものであろう。つまり、第一次世界大戦という祖国の危機によって、エックのナショナリズムが高揚し、ブルジェら同時代の伝統主義の作家たちに対する期待感が高まったと考えられるのである。この戦争に関して「書

翰」には以下のような記述がみられる。

且つ貴方の書物〔引用者注：『仏蘭西文学史』のこと〕は今最高の時期に生まれただけに、一層世間に広まる事と信じます。数年来、特に今欧州、また全世界をも幾分悲しませて居る悲惨な大戦乱が、仏蘭西民族の理智と、勇敢と、献身と、熱烈な而も公明な愛国心と、忍耐と、堅忍と、またその他の真面目な特色を発揮させてから、日本に、文学者、知識階級ばかりではなく、日本人一般の間に仏蘭西に対する同情の機運が向いて来て居るように思われます。今多くの日本人はもつと仏蘭西を識り仏蘭西の事情を究めたいと思つて居ます。仏蘭西の歴史、科学、芸術、言語、及び文学、一語で言へば、ある他の欧羅巴の文化と全く性格を異にした、また多くの点で確かにその敵国の文化より卓れて居るように思はれる仏蘭西文明を研究しようと望んで居ます<sup>18)</sup>。

このように、エックは、日本がフランスの同盟国であることを踏まえつつ、フランス民族の文化的優越性、とりわけ「敵国」ドイツに対する優越性を主張し、日本人がその優れたフランス文化を学ぶことに、『仏蘭西文学史』を刊行する意義を見出している。この日本人による最初のフランス文学史は、エックを介して第一次世界大戦という特殊な時代状況が色濃く反映された書物なのである。

## 5. 『仏蘭西文学史』と「伝統主義の文学」

エックの伝統主義的ナショナリズムの影響下にある太宰施門の文学史では、ブルジェは極めて高く評価されるとともに、新しい文学傾向を代表する作家として紹介されている。この文学史によれば、1885年頃に、科学万能主義に対する異議申

し立てと普仏戦争の敗北によって生まれたナショナリズムを背景として伝統主義へと回帰する文学が登場した。「新古典主義の文学」とも称されているこの「伝統主義の文学」には、以下のような特徴があるとされる。

次第に一般の宗教、中でも加特力教に対する同情の増して行くこと、極めて厳粛な、強い、実践的な道德問題に念ひを潜めること、科学の不正当な僭越を斥け、それに本来の領域を返そうとする高度の哲学的傾向、国民的な古典文学の伝統に帰らうとすること、もつと仏蘭西を強くし、統一させて、政治上社会の上に広く正義を布き及ぼさうとすること、これが略ぼ千八百七十年の惨劇〔引用者注：普仏戦争のこと〕を経験した仏蘭西人が心に懐いた高い理想で、現代文学の上に現はれて居る一般的特性である<sup>19</sup>

このような「一般的特性」は『弟子』以降のブルジェの作品の特性にほかならない。太宰施門は『仏蘭西文学史』と同年に、この反動的な文学を論じた『伝統主義の文学』を刊行しているが、この本で扱われているのが、批評家のフェルディナン・ブリュンティエール（Ferdinand Brunetière, 1849-1906）とブルジェである<sup>20</sup>。その「緒言」でブルジェが「小説なり、批評なり、戯曲なり、旅行記なりで新文学の著しい作例を提供した文学者<sup>21</sup>」として紹介されているように、『弟子』の作者はまさに「伝統主義の文学」を代表する作家であった。

注目すべきことは、『仏蘭西文学史』自体が「伝統主義の文学」を喧伝するために書かれていることである。この本の結論部で、第一次世界大戦がフランス文学に与える影響を予測しながら、戦後に「伝統主義の文学」の果すべき使命が語られている。

この新時代の文学が、〔中略〕人道主義と愛国主義と、芸術と道德との見事な調和を実現させる事が出来たならば、仏蘭西文学、仏蘭西文化は世界最高の文学であり文化であるといふ無上の誉れを擅にすることが出来るであろう。そしてまたその時仏蘭西民族は世界最大の偉れた一民族であると讃美せられるであらう<sup>22</sup>。

ここには世界の指導的立場にあるフランス民族というエックの思想が明らかに反映されている。実際、「書翰」に以下のような記述がある。

この美しい運動〔引用者注：伝統主義の文学のこと〕が次第に高調し、「戦争後の」仏蘭西文学が依然として芸術上の価値を墜すこと無く、次第に厳粛な男性美を発揮し、読者に力を示唆し、仏蘭西並びに全世界の健全な知的道德的精神力を支持するに有力な貢献を与へん事を期待するものであります<sup>23</sup>。

つまり、エックには「伝統主義の文学」を通じて、フランス文化とフランス民族の力と優越性を世界に知らしめるという使徒的な思想があり、「伝統主義の文学」の体現者であるブルジェを日本に紹介することは、彼にとっていわば伝道活動の一環であった。実際、『仏蘭西文学史』の刊行と同時期、つまり第一次世界大戦期に、太宰施門をはじめとするエックの東大仏文の教え子たちによってブルジェやバレスの思想が盛んに紹介され、日本の文壇に少なからぬ影響を与えたのである<sup>24</sup>。

## 6. ブルジェ『死』と戦時下の日本

冒頭で指摘したように、第二次世界大戦中の日本でブルジェの『死』がよく読まれたが、訳者の広瀬哲士（1883-1952）は東大仏文の卒業生で

あり、まさにエックの指導を受けた人物であった<sup>25</sup>。『死』の原書は、第一次世界大戦期の1915年（大正4年）に刊行されており、大戦中すでにエックが東大仏文の授業でこの小説を講読していたことが辰野隆（1888-1964）の回想によって明らかになっている<sup>26</sup>。また太宰施門は『仏蘭西文学史』のなかで、ブルジェの代表作『弟子』と『宿駅』*L'Étape*（1902年）を解説しているが、『宿駅』以後の数あるブルジェの小説のなかで、特に『死』に言及し、「近代文学で最も重要な位地を占めねばならぬ傑作であるように思われる<sup>27</sup>」と賞賛している。太宰は東大仏文を1913年（大正2年）に卒業しているので、彼自身は『死』の講読の授業に参加していないと思われるが、『仏蘭西文学史』における『死』に対する高い評価にエックの影響があることは疑い得ない。いわば、エックが第一次世界大戦中に東大仏文の講義で蒔いた種が開花して、第二次世界大戦中に『死』がベストセラーになったのである。しかし、その種が花開くためには、戦時下の日本という特殊な土壌が必要であった。

以下で、簡単に小説『死』の内容を紹介しておきたい。舞台は1914年の夏から秋にかけてのバリの軍用病院である。第一次世界大戦の開戦直後のバリではドイツ軍による空襲が行われている。そうした戦時下の病院に、癌に冒されて余命いくばくもない外科医オルテグと、戦地で重症を負った軍人ル・ガリックという死に直面したふたりの人間がいる。無神論者のオルテグにとっては、死は絶望であり虚無であって災難にほかならないが、カトリック信仰に生きるル・ガリックは、犠牲的行為としての死は他者の罪を贖うという確信もとで、死を受け入れることができる。

この作品は、第一次世界大戦を題材にした一種の戦争小説であるが、同じ戦争を扱ったアンリ・バルビュスの『砲火』*Le Feu*（1916年）のような反戦小説ではない。確かにブルジェの『死』にも凄惨な負傷兵の描写はあるが、戦争の悲惨さや

愚かさを告発することが主題ではない。戦争はあくまで題材、背景であって、この作品のテーマは死をめぐる物語を介してカトリシズムを擁護することにある。そして、そのブルジェのメッセージを体現する登場人物が信仰に生きるル・ガリックであり、無信仰で実証主義者のオルテグは否定すべき存在として描かれている<sup>28</sup>。

『死』が戦時下の日本で読まれた理由として考えられるは、まず、冒頭で引用した三島由紀夫の文章が指摘しているように、当時の日本は「死の季節」、つまり成人男性はいつ徴兵され、戦死してもおかしくない時代であり、ブルジェの小説で展開される死をめぐる議論に迫真性があったことである。また、死の挿話に溢れたこの作品全体の暗さや重苦しさが、戦時中の日本人の精神状態に合致したのかもしれない。さらに、当時の日本が、いわゆる総力戦体制にあり、小説で描かれる第一次世界大戦中のフランスと似たような状況であったことも挙げられる<sup>29</sup>。

しかし、最も重要なことは、この作品が、戦死、つまり祖国のために死ぬことを正当化、あるいは美化する思想が示されていることであり、その思想はブルジェの代弁者ル・ガリックの言動によって示されている。歩兵連隊の中尉ル・ガリックはカトリック信者であるとともに愛国者でもある。ル・ガリックの「フランスが負けたら亡びて了ひます。が、カトリックの大国ですから亡びる筈はないんです<sup>30</sup>」という言葉が表すように、彼にとって祖国のために戦うことは、カトリックのため、信仰のために戦うことにほかならない。実際、『死』の第17章では、ル・ガリックの幼友達の戦死が、英雄的な死、カトリックの伝統を持つフランスに捧げた崇高な死、まさに殉教として語られている。つまり、祖国のために死ぬことは神に捧げる崇高な犠牲的行為なのである。いうまでもなく、このような考え方は、いわゆる「皇国史観」の影響下で祖国のために死ぬことが天皇に捧げる犠牲的行為として称えられていた戦時下の日

本では、受け入れやすいものであったと思われる。

## 7. おわりに

最後に、その「皇国史観」を代表する国史学者で、第二次世界大戦期の日本で大きな思想的影響力を持っていた平泉澄（1895-1984）が、ブルジェのイデオロギーに共感し、戦前から戦中にかけてブルジェを中心にフランス伝統主義の研究と紹介を行っていることを指摘しておきたい<sup>31</sup>。平泉は1930年（昭和5年）から翌年にかけてヨーロッパに留学するが、そのフランス滞在中にブルジェの著作を読んで感銘を受け、彼とコンタクトを取った。直接ブルジェと会うことはできなかったが、この作家から手紙を受け取った平泉は、その手紙による教示を手がかりにフランス伝統主義の研究を進め、その成果といえる論考を1940年（昭和15年）に刊行した『伝統』に収録している<sup>32</sup>。

平泉がブルジェに傾倒したのは、何よりもこの作家がフランス革命を激しく批判しているからであった。そもそも彼の留学の主たる目的がフランス革命の研究であったが、平泉は、革命の本場フランスで反革命のイデオロギーが存在することに驚きを感じるとともに、自らの思想の後ろ盾を得た思いであった。留学当時、つまり昭和初期の日本でのマルクス主義の広がりにより危機感を抱いていた平泉は、革命イデオロギーを否定する理論を必要としており、それをブルジェの著作のなかに見出したのである<sup>33</sup>。そして、彼は、戦時下の日本で、ブルジェの伝統主義をもつばら反革命の思想として紹介したのである<sup>34</sup>。

重要なことは、エック経由にせよ平泉経由にせよ、日本におけるブルジェの受容には二つの世界大戦と密接な関係があることである。第一次世界大戦がなければ、おそらくエックはブルジェを始めとするフランス伝統主義の文学をこれほど熱心に日本に紹介することはなかったのであり、

また第二次世界大戦がなければ、ブルジェの小説が日本の読者に受け入れられることはなかったであろう。一般に、伝統主義は、民族的なアイデンティティとしての伝統を媒介に国民を統合するという目的で、戦時下に要請されるイデオロギーであり、そこにブルジェと平泉の接点があったともいえるが、戦前、戦中の日本ではブルジェの思想は、まさにそのようなものとして受容されたといえる。そして、第二次世界大戦後の日本において、ブルジェの著作がほとんど論じられなくなったのは、その文学的価値が疑問視されたことに加えて、やはり、彼の思想が戦時中の「皇国史観」を連想させる性格を持っていたからであろう。

もちろん、小説『死』は、こうした思想的側面に加えて、作品自体に魅力があったからこそ多くの読者を獲得したといえる。実際、この小説は、多分にメロドラマ的な要素はあるものの、物語の構成に無駄がなく、あたかも古典悲劇のような緊張感があり、作品としての完成度は高いと思われる。また、戦争という時局的な興味だけではなく、死に意味があるのか、信仰とは何かといった普遍的なテーマを扱った哲学的な小説でもある。逆に、この小説に作品としての魅力があり、よく売れたからこそ、ブルジェの思想が知識人層にとどまらず、一般の読者に知られるようになったともいえる。いずれにせよ、日本におけるブルジェ受容のあり方は、戦前のアカデミズムの影響力、そして、戦時下という特殊な政治的、社会的状況におけるフランス文学受容の一側面を浮き彫りにする非常に示唆的な事例だと思われる。

## 注

- 1 三島由紀夫『葉隠入門』（新潮文庫）、新潮社、1983年、89頁（初版：光文社、1967年）。
- 2 『死』（東京堂、1939年）の訳者である広瀬哲士は次のように書いている。「我が国で彼の作品を訳をもって紹介したのは『弟子』の山内義雄君が最初であった。それはフランス文学史上のエポック

を劃した名作であったが、『死』が出るまで『弟子』の初刷が売切れるまでになつてゐなかつたように思ふ。それはいかなる理由からであつたかいまだ十分わからない。私の『死』はブルジェを日本に紹介する二番目の作品であつたが、機宜しきにあつて驚くべき売行であつた」（「はしがき」、ブルジェ『真昼の悪魔（下巻）』広瀬哲士訳、東京堂、1941年、1頁）。

『死』以後、戦時中に出版されたブルジェの小説の翻訳を以下に示す（カッコ内は訳者と出版社）。1939年：『大戦と女たち（ラザリヌ）』（木村太郎、春陽堂書店）、『愛（裁く者）他1篇』（木村太郎、春陽堂書店）

1940年：『家（上・下）』（広瀬哲士、東京堂）、『心』（木村太郎、春陽堂書店）、『死の意味』（木村太郎、春陽堂書店）、『死の意義』（滝口亮、明窓社）、『痛ましい謎』（田辺貞之助、春陽堂書店）、『復活』（増田良二、富山堂）、『我らの行為は我らを追ふ（上）』（工藤肅、白水社）

1941年：『我らの行為は我らを追ふ（下）』（工藤肅、白水社）、『真昼の悪魔（上・下）』（広瀬哲士、東京堂）、『罪（モニク）』（新城和一、東京堂）、『姉妹』（新城和一、東京堂）、『弟子（上・下）』（内藤濯、岩波書店）

なお、上記の『死の意味』と『死の意義』は『死』と同じ *Le Sens de la mort* の翻訳である。

- 3 明治期の日本におけるフランス文学の受容については、富田仁『フランス小説移入考』（東京書籍、1981年）、富田仁・赤瀬雅子『明治のフランス文学—フランス学からの出発』（駿河台出版社、1987年）を参照のこと。
- 4 上田敏「仏蘭西文学の研究」、『帝国文学』第3巻第8号、1897年8月（『定本上田敏全集』第3巻、教育出版センター、1978年所収）。
- 5 『定本上田敏全集』第3巻、196頁。
- 6 永井荷風「仏蘭西現代の小説家」、『秀才文壇』第9巻第4号、1909年2月（永井壮吉『荷風全集』第6巻、岩波書店、1992年所収）。
- 7 『荷風全集』第6巻、318頁。
- 8 『明治・大正・昭和 翻訳文献目録』（風間書房、1988年〔初版：1959年〕）によると、日本で最初のブルジェの翻訳は、1902年（明治35年）7月に雑誌『太陽』に掲載された短編小説『最後の一滴』（田山花袋訳）である。『最後の一滴』の底本は不明。この作品は復刻され『明治翻訳文学全集 翻訳家編16 田山花袋・国木田独歩集』（大空社、2003年）に収録されている。
- 9 ブルジェの芥川龍之介に対する影響を論じた

以下の研究がある。倉智恒夫「芥川龍之介における『パステル』—ボール・ブルジェをめぐる」、『比較文学』、第35巻、1992年、25-37頁。

- 10 エックと彼の活動に関する研究には以下のものがある。西堀昭「エミール・ルイ・エック（1866-1943）」、手塚豊編『近代日本史の新研究III』、北樹出版、1984年、33-64頁；村田裕和「仏蘭西学会の設立と伝統主義論争—エミール・エックと太宰施門の第一次世界大戦」、『比較文学』第50巻、2007年、95-107頁。
- 11 太宰施門は、1913年（大正2年）に東大仏文を卒業し、後に京都帝国大学文学部仏文科の教授となった。バルザックに関する著作が多いが、1946年（昭和21年）にブルジェ研究の集大成といえる『ブルジェ前後 1870-1914』（高桐書院）を刊行している。
- 12 太宰施門『仏蘭西文学史』、玄黄社、1917年。
- 13 村田裕和、前掲論文、101頁。
- 14 同書、同頁。
- 15 太宰施門、前掲書、「書翰」4頁。
- 16 同書、「書翰」9頁。
- 17 現在のテリトワール・ド・ベルフォール県にあたるこの地域は、普仏戦争の際にプロシア軍に激しく抵抗し、そのために、戦後もドイツに割譲されずフランス領にとどまった。村田裕和が指摘するように、エックの伝統主義的ナショナリズムはロレーヌ地方出身でほぼ同世代のモーリス・バレスの思想と親近性があると考えられる。実際にエックはバレスの愛国主義を称える内容の講演を日本で行っている（村田裕和、前掲論文、97-98頁を参照のこと）。
- 18 太宰施門、前掲書、「書翰」3-4頁。
- 19 同書、472-473頁。
- 20 太宰施門『伝統主義の文学』、仏蘭西学会出版部、1917年。
- 21 同書、「緒言」6頁。
- 22 太宰施門『仏蘭西文学史』、611頁。
- 23 同書、「書翰」9頁。
- 24 第一次世界大戦期のフランス伝統主義の紹介と日本の文壇への影響については、村田裕和の前掲論文を参照のこと。
- 25 広瀬哲士は1907年（明治40年）に東大仏文を卒業し、1910年（明治43年）から1934年（昭和9年）まで慶応義塾大学で教鞭を取った。
- 26 辰野隆「ボオル・ブルジェ考」、『辰野隆選集』第2巻、改造社、1950年、147頁。
- 27 太宰施門『仏蘭西文学史』、541頁。
- 28 本文で述べたようにエックは第一次世界大戦期

- に東大仏文の講義で『死』を取り上げたが、辰野隆によると、その講義でエックは「実証論者オルテグ博士を憐れみ、確乎たる信仰に生きる青年士官ル・ガリックを讃美」していたという（辰野隆、前掲書、147頁）。
- 29 『死』の翻訳が刊行された1939年（昭和14年）には、前年に制定された国家総動員法に基づいて国民徴用令が出されている。
- 30 ブールジェ『死』広瀬哲士訳、東京堂、1940年（初版：1939年）、41頁。
- 31 ただし「皇国史観」には多様な側面があり、平泉の思想に収斂されるものではない。この点に関しては以下の書物を参照のこと。昆野伸幸『近代日本の国体論 ― <皇国史観>再考』、ペリカン社、2008年。
- 32 平泉の『伝統』（弘文堂、1940年）は国史研究の論文を集めた「内篇」と「フランスに於ける伝統主義」と題された「外篇」の二部構成になっている。「外篇」は、「序説」、「バルザック」、「テーヌ」、「ル・プレー」、「ブールジェ」から成っている。バルザック（Honoré de Balzac, 1799-1850）、テーヌ（Hippolyte Taine, 1828-1893）、ル・プレー（Pierre-Guillaume-Frédéric Le Play, 1806-1882）は、いずれもブールジェの伝統主義に影響を与えた作家、思想家である。なお「バルザック」の章のなかに、ブールジェ直筆の手紙の写真が掲載されている。手紙のなかで、ブールジェは平泉にバルザックの小説『田舎医者』*Le Médecin de campagne*（1833年）と『村の牧師』*Le Curé de village*（1841年）を読むように薦めている。平泉が強調しているように、両作品とも反革命のイデオロギーが顕著に表れた小説である。なお、『伝統』は発売から1年で7版を重ねるベストセラーになったという（田中卓編著『平泉澄博士全著作紹介』、勉誠出版、2004年、97頁を参照のこと）。
- 33 おそらく平泉は留学前に太宰施門の研究を読んでいたなかったと思われる。しかし、帰国後に書いた『伝統』には太宰施門の『伝統主義の文学』からの引用がある（平泉澄、前掲書、613頁）。
- 34 平泉は、ブールジェの評論集*Au service de l'ordre* I, II（1929-1932）の翻訳権を得て、その第1巻を森下辰夫に翻訳させ、自ら序文をつけた『秩序のために』（至文堂）を1937年（昭和12年）に刊行している。なお『伝統』と『秩序のために』のほかに、平泉は以下の著作でブールジェに言及している。「国史家として欧米を観る」（講演）、1931年11月（『平泉博士史論抄』、青々企画、1998年所収）「民族の特異性と歴史の恒久性」（講演）、1932年2

月（『平泉博士史論抄』所収）。『革命論』、『教学叢書』、文部省、1934年（『先哲を仰ぐ』、日本学協会、1968年所収）。『悲劇縦走』、皇學館大学出版部、1980年。「東京大学旧職員インタビュー（3）平泉澄インタビュー（3）」、『東京大学史紀要』第15号、1997年3月、61-82頁。